

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	小林 勇太 (こばやし ゆうた)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科修士課程 2年
発表年月 または事業開催年月	2023年 10月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第49回大会日本認知・行動療法学会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	小林 勇太, 内田 太朗, 熊野 宏昭
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	関係フレーム理論の観点による脱フュージョン介入に関する文献レビュー
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>・概要</p> <p>【問題と目的】</p> <p>脱フュージョンとは、思考や感情などの私的出来事の機能変容を促す行動的プロセスである (Masuda・武藤, 2011)。脱フュージョンによって自己と思考や感情など不快な私的出来事との間に距離ができ、不快な私的出来事が行動に与える影響力を弱めることが可能になると考えられる。脱フュージョンのメカニズムに関する研究として、ACTの理論的基盤である関係フレーム理論 (Relational Frame Theory : 以下, RFT) に基づいた検討が行われている。Luciano et al. (2011) は脱フュージョンを構成する要素として、直示的フレームに基づき自己と私的出来事の区別関係を促すものと、階層フレームに基づき自己と私的出来事間に明確な階層関係を作り出す 2つの行動プロセスを挙げている。脱フュージョンを構成する要素を明らかにし、それに沿った介入を行うことは、効果的に脱フュージョンを促す上で重要である。そこで、本研究では、RFTの観点によって区別と階層関係それぞれに着目した脱フュージョン介入に関する先行研究を概観するために文献レビューを実施する。そして、それらの介入効果をまとめ、今後の展望を述べる。</p> <p>【方法】</p> <p>論文の検索には Google Scholar と Web of Science を使用し、"relational frame theory" "defusion" "distinction relations" "deictic relations" "hierarchical relations" をキーワードとして検索を行った。論文の選定基準は、学術雑誌に掲載されていること、英語または日本語で書かれていること、介入を行っていること、とした。以上の基準により 6 件の論文が本研究の対象となった。</p> <p>【結果と考察】</p> <p>Luciano et al. (2011) は、問題行動を示す 12 歳から 15 歳の青年を対象に、自己と私的出来事の区別関係に着目した介入プロトコルである Defusion I と、区別に加えて階層関係に着目した介入プロトコルである Defusion II の比較を行った。全体的として Defusion II 群の方が Defusion I 群よりも高い効果を示し、問題行動の減少、マインドフルネススキル「評価をしない受容」の増加、心理的非柔軟性の低下で有意な変化が見られた。Foody et al. (2013), Foody et al. (2015) は、学生の非臨床サンプルを対象に、Defusion I と Defusion II に相当する介入プロトコルの効果の違いを検討した。これらの</p>	

研究では、実験室においてネガティブな自己関連の思考を誘発させ、それに伴う苦痛度に関する指標によって介入効果が比較された。結果は、ネガティブ思考に伴うストレス度が階層関係に着目した介入群において介入前後で大きな減少を示した。Gil-Luciano et al. (2017) は、成人の非臨床サンプルを対象に、Defusion I 群と Defusion II 群、統制群の 3 群で介入効果を比較した。また、行動指標としてコールドプレッシャー課題と嫌悪映像課題それぞれの耐性に関する指標が用いられた。その結果、どちらの行動指標においても Defusion II 群で最も高い効果が示された。López-López & Luciano (2017) は、学生の非臨床サンプルを対象に、Defusion I 群と Defusion II 群、統制群の 3 群で介入効果を比較し、不快感を誘発する認知課題のパフォーマンスに関する指標が用いられた。その結果、全ての群で認知課題によって生じる不快感は減少したが、特に Defusion II 群でその傾向が大きかった。また、認知課題のパフォーマンスは介入前後で Defusion II 群において最も向上した。Ruiz & Perete (2015) は過剰な怒りを示す 5 歳児を対象としたシングルケースデザインを用いて、RFT に基づく ACT の簡潔な介入プロトコルの効果を検討した。怒りの持続時間、強度、回数の全てで改善が示され、1 年間のフォローアップでも維持された。

以上のことから、自己と私的出来事を階層的に関係づける行動プロセスが脱フュージョンを促す上で重要な要素であると考えられる。これらの研究により、脱フュージョンに必要な行動プロセスが RFT の観点から記述可能になってきている。今後は、RFT による区別や階層関係など脱フュージョンを構成する行動プロセスを直接測定し、関連する指標との関係を調査することで、脱フュージョンの詳細な行動プロセスの整理をさらに進めていく必要がある。

・成果

上記の内容についてポスター発表を行い、知見を提供すると共に他の参加者と意見交換を通して交流を図った。自分の研究に対して意見をいただくことで理解を深めることができた。

※無断転載禁止